

二つのピアノリサイタル

1. 2001年2月23日(金) カザルスホール

ラザール・ベルマン ピアノリサイタル

曲目：シューベルト ソナタ変ロ長調 D960 遺作

休憩

リスト 巡礼の年「スイス」より オーベルマンの谷

シューベルト作曲=リスト編曲 3つの歌曲

糸を紡ぐグレートヘン

アヴェ・マリア

魔王

リスト 巡礼の年「イタリア」より ダンテを読んで

アンコール ショパン 英雄ポロネーズ

2. 2001年2月24日(土) 横浜みなとみらいホール

イングリット・ヘブラー オールモーツアルトプログラムピアノリサイタル

曲目：幻想曲 d moll K397

ロンド D Dur K485

ソナタ D Dur K576

お母様聴いてちょうどいい(きらきら星変奏曲) C Dur K265

休憩

幻想曲 c moll K475

ソナタ c moll K457

アンコール ソナタ K330 2楽章

とても対照的な二人のピアニストの演奏を聴き、ピアノという楽器の表現力に改めて感服させられた。後日に当たるヘブラーの演奏を聴きながら、今日聴いているピアノの音は“粒”だな、とおもった。大きい粒、小さい粒、固い粒、柔らかい粒、ちょっと触っただけでも壊れてしまいそうなうんと纖細な粒。いろいろな粒があった。そして、前日に聴いたベルマン氏の演奏するピアノは“波”だと思った。ゆりかごでゆられているような、海の波をのんびりと眺めているような。音はもちろん物理的には波動現象であるから、ここでいう“粒”、“波”というのは量子物理学でいう“duality”的ことではない。純粋に感覚として受容されたものを言葉にたとえてみただけのことである。

これだけで、今回聴いた二つのピアノリサイタルが私にとって如何に対照的な音楽であったかを感じていただけると思う。個人的好みとして言えば、私はヘブラー氏の演奏が好きである。そして、今回はプログラムの選曲上、或いは現在の受容する立場としての私の

心境に直接訴えてくるものがあった点でも、ヘブラー氏のリサイタルにより大きな感銘を受けた。

具体的に言えば、まずベルマン氏の演奏。シューベルトの D960 が始まったときに、そのテンポの遅さに驚き、ムードミュージックのように（右ペダルを長く踏んでいるのかな）、全ての音が何だか静かな中でウォンウォンうなっているような印象を感じた。私のイメージしているシューベルトとはちょっと違う。静かな伴奏の中で、決して大きくなくても良いからメロディーはきちんと聞こえてくる、そんな演奏がイメージとしてある。私にはメロディーが曖昧になって聞こえてしまった。

リストの曲については、知識もイメージも持ち合わせていないので、特に感想を述べることができない。シューベルト作曲 = リスト編曲の歌曲については、疑問が残った。アヴァ・マリアについては、歌の内容からしてベルマン氏の演奏でも違和感は感じなかった。しかし、残りの二つについては私にはやはりシューベルト作曲の歌曲としてのイメージが強くある。激しさというより、ゆったりとした心地よいスイング、メロディーの曖昧さ。こういったことが違和感を覚えた。でも、リストの編曲になった時点でもし原曲のイメージとは離れたものになっていたとしたら、或いはベルマン氏の演奏のほうがリストの意図する音楽だったのかもしれない。この辺りは私は不勉強で分かりません。

アンコールのショパン。これが最もベルマン氏の演奏法と、曲の様式に合っているのではないかと私には思われました。これは心に残る演奏でした。

一方、ヘブラー氏の演奏。この人はモーツアルトのスペシャリストとして定着している感があるし、現に私も彼女の演奏は好みで、新星堂が特別企画で出した古い録音の全集も、新しい録音のピアソナタ全集も CD を持っている。ただ、ちょっと生真面目すぎて、天才モーツアルトはもう少し遊んで作曲していたのではなかっただろうか、と勝手に想像してみたりする。その辺りが、全集は残されていないけれど、クララ・ハスキルの演奏と大きく違うところかな、と思ってみたりする。いずれにしても一個人として勝手に想像しながら楽しんでいるのだから、あまり深い理由はありません。

ヘブラー氏のリサイタルを生で聴くのはこれが2度目。一度目の時には、スタインウェイでもあんなに渋い音がでるのか、と思ったことを記憶している。今回は P ブロックというステージの後ろ側の席で聴いた。たぶん音響的には劣るものがあるのだと思う（ピアノの反響板の後ろなのだから）。でも、ヘブラー氏のこだわった音の出し方、音色が一体になって感じられ、私としては結構気に入ってしまって、休憩後も普通の座席の方に移動しようとは思わなかった（かなり空席が多かった）。

長調の曲についてはやはり CD で聴くときと同様な印象を持ってしまった。でも、短調系は素晴らしかった。特に、単純な音のみでつづられている旋律については、慈しむような丁寧な演奏が本当に心にしみた。そして、ペダルはあまり使わないのかと思っていたら、以外だったことに、非常に細かいペダリングをかなり多く使っていることに気が付いた。

こんなこと、ピアノ演奏のプロにしてみれば当然のテクニックなのかもしれないが、ピアニストが自分のイメージする音を出すためにいかなる工夫を凝らしているのかを素人の私に改めて感じさせてくれた。

しかし、いずれの音楽も、それぞれの演奏家の解釈。個人的好みを離れて判断すれば両者共に、非常に個性のはっきりとした、自分の音楽を表現できる演奏家として尊重したいと思った。

2001年2月28日

寺内 かえで